

あくまでも自分史として

「岳陽」と共に

第 31 号

発行日
2024. 7. 15
編集・発行
井上講四／堂本彰夫
※連絡先
〒901-2225
沖縄県宜野湾市
大謝名 3-13-24
教育協働研究所
～岳陽舎～
(井上講四宅)
Tel:098-963-9282
E-mail:
gakuyou17@outlook.jp

○最終的にAIは人類を減ぼすのか？人工知能研究者が導き出した「意外な答え」今後もし生き残るのはどんな仕事か？

この話題については、あまり深掘り出来ない私であるが、人間とAIの関係の結末？は、興味あるところではある！ネット情報によると、次のようなことが書かれていた。

「現時点でAIが学習しているのは、主としてインターネット上のテキストデータ。もしもAIがたいの文章を人間よりも正確に、効率よく書いてくれるようになるのであれば、人間によって作られる文章自体が減っていくことは避けられない（著作権保護の問題は残るが）。しかし、当然、品質は下がっていく。生成AIに条件を与え、新聞記事のような文章を生成してもらうことはできて、世の中のどこに記事にしたいような取材対象があるのかを探ったり、そこに実際に向いて人の話を聞いたり状況を確認したりすることは、結局、記者にしかできない（記事をベースに文章を書き換えることは技術上でも、そこで生成された記事をさらに学習して…というサイクルにはまり込んでしまうと、事実や知りた内容からはどんどん離れてしまう…こうした状況を利用して、意図的に間違えた情報や、特定の勢力に有利な情報を粉れ込ませることもやりやすくなる。」

したがって、「人の手による価値あるコンテンツ」の重要性が、再び増していく。…私たちがAIに期待するのは「人が作ったかのような成果物」。そのためには、人がどんなデータや文章を好むのかを、定期的に検証しなければならない。…人による「品質チェック」は、必ず残るニーズ。今後も生き残る仕事、あるいはクオリティは、AIに学習される価値のあるもの。…価値を作り出せるのは人間。…AIが人間を減ぼすことはないはず…とある！何故か、安心した次第でもあるが、では、その価値は、誰が、どのように生み出すのであろうか？！

○人間の価値は、アルファベットで示されるのか？

かつて「コ型人間」のことがもてはやされた時期があったように思うが、次のようなネット記事があった！「『I型人材』とは、特定の分野を極め、専門的な知識や経験とスキルを蓄積し、これらを軸にして、その他の幅広いジャンルに対しても知見を持っている。英語で『I』の文字の縦を「専門性」、横を「視野の広さ」に見立て、…そして、『コ型人材』は、異なる分野の2つ以上の専門的な知識を極めた人材で、『ダブルメジャー』とも…専門性が高い分野の深い知識を複数持つことで、ひとりでも独創的な発想をすることができると特徴」とある。

また、『H型人材』は、強い専門性を誇る分野が1つあり、他人の専門性を横軸で繋げられる架け橋となる人材…このような他者との連携をする力も、今後求められる人材の重要なポイント。『I型人材』は、従来の日本企業が重用した、1つの専門ジャンルを極めた人材のこと…特に技術職に多く、営業や企画など異動の多い職種では少ない…ともある。

いずれにしても、「専門性」と「視野の広さ(教養?)」、そして、「他者と連携する力」が、これから求められる人材の力(理想)であることは間違いない！余計なことだが、これらが、現在主張されている「多様性(個性の尊重)」と、どのように結びつくのか？そしてまた、ネット社会で脚光を浴びて来た「インフルエンサー」や、「アンドロイド」「サイボーグ」等の人材？は、これらに如何に絡まるのか？未来は、複雑である！！

○ドキドキ、ハラハラだったが、面白かった？この一月半！

過日、バレーボールのネーションズリーグが終了した！約一月半に亘る大会において、今回は、男女とも銀メダルという快挙(奇跡?)をなした！そして、来る月末のパリオリンピックへのアベック出場(古臭い言い方?)となった！リアルタイムの放送では、それこそ手に汗握る観戦となったが、試合結果はもろんであるが、そのプレーの素晴らしさ(アクロバットにも似た?)に、いたく感動した次第である(これまでの日本とは、まさしく違っていた!)！何故、こうも変わったのか？選手もコーチ(監督)も、基本的には変わっていないにも拘らずである！個々の選手の力量が上がったと言わざるを得ないのであるが(特に古賀選手)、これについて、私は、昨年の女子世界バレーボール選手権(オリンピック代表予選)に関して、次のような感想を述べている(第14号)！

○非情な解せない？采配？そこには何があったのか？随分日が経ってしましたが、…日本は、結局ブラジルにも負け、残念ながら、今回での代表決定には至らなかった！そして、そこにおいて、最後の二セットは、これまでも中心選手(主将でもあった!)として奮闘してきた古賀紗理奈選手の姿がなかった！…何か、第3セットの終了時点でトラブルがあったものかと、その時は思うだけであったが、試合終了後のインタビューでは、自分自身は、調子は悪くなかった！その理由(不起用)については、監督に聞いてくれというようなコメントであった！問題は、その後の、真鍋監督の言である(決定率、効果率、返球率が下がっており、ある意味交代は、理の当然だ!)。これは、下衆の勘繰りかもしれないが、今回の成績(実力?)でも明らかのように、たとえ今回の機会でも出場権をとったとしても、今(まで)の古賀選手(中心のチーム)であれば、おそらくメダル獲得は困難!!監督は、そう思っている采配ではなかったのかということである!!そこで注目されるのが、その非情な(解せない?)扱いを受けた古賀選手の、これからの踏ん張りである!!試合後の涙もなかったが(采配への怒りや負けた情けなさ?)、とにかくその悔しさを、どのように晴らすのか?そこが重要であるということであり、それがまた、監督の本当の思いなのかもしれない!!

ある意味、私の読み(予感?)は当たっていたということであるが、その悔しさと努力の積み重ねは、他の選手にも、当然あったということである！何という素敵な時空であったのか！(井上)

○知らなかった！そして、何故か、心を打たれた！

6月23日、「慰霊の日」！その日は、沖縄では、あの意味最も忘れられない（忘れてはいけない！）日である。79年前、かの戦争において、沖縄が地上戦の舞台となり、事実上終戦を迎えた日である！だが、最近の私は、その日のことを、あまり頓着しなくなっている！詳しいこと（思い）は、ここでは書けないが、この度のテレビ放送を見て、何故か、心を打たれた！まったく知らなかったということもあるが、そこに示されている真実（人間の生き様）が、本当に尊いものに思えたからである！

そこで、改めて、そのテレビ放送であるが、それは、最近復活したNHKの「新プロジェクトX」の、「旧作アンコール 命の離島へ 母たちの果てなき戦い」というものであった（初回放送日：6月29日）。2005年5月の放送ということであったが、「終戦後、沖縄では水道施設が壊滅。川の水を生活用水にすると感染症がまん延した。医師は軍医に駆り出されて亡くなり、極度に不足した。窮状に立ち上がったのは100人以上の女性たち。現在の保健師にあたる『公衆衛生看護婦』となり、各離島で島民の命を守る。結核の疑いがあつても「周囲に知れると困る」と追い返されるが島民に誠実に向きあい、信頼を得ていく。79回目の沖縄慰霊の日を迎え、女性たちの奮闘秘話をアンコール。」とある。

病气や生苦に困っている人達を救いたい！「誠実」という言葉に込めた、彼女達の使命感と生き様。それが、背中で見ていた子ども達には伝わっていた（その時は本当に辛かったであろうが！）今の教育界に、何かを訴えている？ちなみに、当時のスタジオに登場していた親子、子の方の人物は、私と同じ大学のN教授であつた！顔を合わせたこともある！気弱そうな人に見えていたが、その親子の生き様を知った今、それは、かれの優しさとなつていたということでもあろう！驚きもしたが、土地や人間の評価は、表面的ではいけないということでもある！！

○「若い」の思い込みとは恐ろしいもの？！

別コーナー（「新・教育協働への道」26）でも書いたが、この度、大変な間違いをしでかしてしまつた！法律条文教育基本法中の「国家及び社会」という表記が、2006年の改正から、そうなたつたという説明をしていたが、実は、最初からそうなたつたということである！法改正期の状況に関わる変な先入観（当時の首相のゴリ押しに対する？）が、そうさせたとも言えるかもしれないが、大失態であることは言うまでもない（専門家失格！いくらこの論稿が学術論文ではないとは言え、決してあつてはならないミス！）

ただし、文意は、基本的には変わらず、つまり「：国家及び社会の形成者：の育成」というところについては、常に緊張感をもって（「正当に」と言いたいところであるが？）解釈していかねばならないということである！ちなみに、真に凶々しいと思うが、そのお詫び・訂正、あるいは差し替え版は考えていない（否、實際行えない！）！ここでこの言及で、そのことは許してもらうしかない（これは、老いたる専門家の、ある種の「誠実」ということでもある！！）！

- ・短歌に託して！今回は、「誠実」を前面にして！！
- ・価値あるもの それは 人間が生み出す！
だがそこには 「誠実さ」が必要！！
- ・求められる人材像 そこに「誠実さ」
いかにある？ それを問わなければ！！
- ・何故か当たつていた？ でもそれは上辺の話？
そこにあるのは 努力と「誠実」！！
- ・本当に心打たれた！ それは何故？
答えは多分 真の「誠実さ」にある！！
- ・「若い」たる故の 思い込み！！
失態だが そこにはある種の「誠実さ」あり！！

〈特別コーナー〉堂本彰夫の古代史旅枕 ③

○改めて、古代九州の全体像を探る―その2―
先号②では、北部九州での、神功皇后（皇孫延）や武内宿禰の謎の解明が必要であることを述べたが、それにしても、その課題は、とてつもなく大きく、しかも複雑怪奇である！しかし、そこに、一筋の光明がないわけではない！それが、実は、「古代九州の全体像を探る」ということである！本「旅枕」は、期せずして（偶然にも）、そのような軌跡を迎えることにもなっているわけであるが、要は、中南部九州の諸勢力と北部九州の諸勢力（新たに加つた半島経由の新渡来系の勢力も含めた）の集散離合の歴史が、その後の我が国の古代史（建国史）を形づくつたということである！！したがって、記紀神話に言う、瓊瓊杵尊の天孫降臨／阿多の勢力（軍種）と言えなくなるのである！！

しかるに、「記紀」は、後世において（8世紀前後）、その時の為政者権力者達が（中心人物は、藤原不比等と持統天皇）、自らの正統性・正当性を主張（確立）すべくして、都合の悪い史実は、神話等であらゆるやむやみに我が国の建国史を描いた（捏造・創作）ということであるが、ここの文脈からすれば、それらは、彼らが依つて立つ、近畿の「大和王朝（朝廷）」から捉えた歴史（創作物語）であつたということでもある！だから、その本家本元であつた北部九州の実体／実態（九州倭国）、そして、おそろしくその実体／実態の一翼を担っていた（否、近畿倭国にあつては、そちらの要素が強かつた）中南部九州勢力（狗奴国等）の真相を隠した！！そして、彼らを蛮族の熊襲（球磨會社）として蔑視、あるいはその存在を闇に葬つてしまつた！！だが、一方で、その中南部九州のことを、間接的に意識させようとした！！そのように思われるのである！！

とにかく、その攻防の地（中心地）が、ある時期、筑後の高良山周辺であつたことは間違いなく（その痕跡／象徴が、まさに「高良大社」）、そこを追求していくことが、且下の目標ということになる！！（つづく）
（堂本）
〈編集後記〉本日（15日）、東の間の旅から戻りました（これについては、次号にて！）！梅雨の福岡から、真夏（灼熱）の沖縄へ！それにしても、沖縄は暑い！改めて、これから、どんな日々となるのか？いろんなことがあることと思ひますが、それなりに頑張つていきます。
（井上／堂本）